博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	伊藤康裕
論　文　題　目	安慧の唯識説における認識論

「この世界はすべて識のみである」という唯識説は大乗仏教の瑜伽行派の重要な教理の一つである。この唯識説についてはインドの諸論師により多くの解釈が提示されている。本論文は、安慧（Sthiramati ca. 510-570）の唯識説についての解釈を考察の対象とするものである。特に日常的な認識が成立している場において唯識説がどのように成り立つのかを、安慧の唯識説解釈に即して解明することを試みている。考察の基盤となる主たるテキストは、『中正と両極端との弁別』（Madhyāntavibhāga = MAV）への世親の釈（Madhyāntavibhāgabhāṣya = MAVBh）に対する安慧の復註（Madhyāntavibhāgaṭīkā = MAVṬ)である。

分析にあたっては、唯識の教理を用いて日常的な認識を説示する際に必要と見なされるいくつかの概念を取り上げ、それらを考察の対象としている。（１）すべての（三界の）諸現象を識のみに還元する唯識説においては、諸現象は心とそれに付随する心的作用（心所）に由来する。その心と心が虚妄分別（abhūta-parikalpa）と規定される。本論では、この虚妄分別の在り方を分析する。更に、（２）日常的な認識における見るもの（能取）・見られるもの（所取）にあたる二取の生起を説明し、（３）諸現象（対象）が識に立ち現れることの意味を文献的に解析する。そして、（４）認識対象の確定要件である行相 (ākāra) を明らかにする。

本論 2.1 では、虚妄分別と二取との関係については、肯定されるべき在り方と否定されるべき在り方という二つ異なった在り方を安慧が示している、という点を指摘している。安慧によると、虚妄分別と二取との関係は、原因である虚妄分別に構想分別（parikalpa）があり、そのはたらきの結果として二取が構想分別されて（parikalpyate）顕れるという因果関係である。そして、そのように顕れる二取は実際には存在しないが、識が有している顕現の存在することは日常的には肯定される。二取と識が有している顕現とは、両者ともに顕れもしくは像という点では異ならないものの、存在論的には異なっている、ということを本論は指摘している。

本論 2.2 では、MAVṬ における二取の生起を「仮説」（upacāra）の視点から説明する。仮説とは、我（主観的なもの）法（客観的なもの）の顕現している分別に対して、実際には存在しないそうした我法があると仮に設定することである。この仮説が可能となるには、拠り所となる、我法の顕現している識が存在することである。これは識における顕現の存在を肯定的に捉える可能性を示唆している。本論文はこの仮説の構造を明らかにしている。

本論 2.3 では、対象の認識において何らかの像が識に立ち現れてくる場合の顕現（prati-√bhās, pra-√khyā, etc.）の在り方を分析する。その結果、安慧が顕現に相当する語を使い分けていたという可能性を指摘する。あるものに対して、それが自体としては存在しないにもかかわらず実在する、と構想分別する場合、すなわち、否定されるべき二取がすでに生じている場合は、その二取の顕現を prakhyāna という語で示す、一方、日常経験的に存在することの否定されないような顕れについては、pratibhāsa もしくは ābhāsa という語で示す、という使い分けがなされていた可能性を指摘している。これは本論文の成果である。

本論 2.4 では、安慧が想定したであろう対象認識の成立過程の一モデルを提示する。虚妄分別は本来的には分別構想を離れているが、そのような虚妄分別が他の分別（＝識）によって妄分別（√kḷp）されることによりこの現実世界が成立する、換言すれば、認識作用が成立する、という安慧の見解を文献的に確認する。このことから、本来的には分別構想を離れている虚妄分別が各刹那に対象の顕現を有して生じるが、その虚妄分別が別の分別によって分別されることにより、主観客観というかたちの表象が生じる、という認識過程を安慧は想定しているのであろう、と推察している。こうした安慧の認識論についての解釈は、他のパラレル文献によって更に精査される必要があろう。

2.5 では、日常的な認識における認識対象を、対象の形象 (ākāra) という概念を手がかりとして、考察する。まず、安慧より以前に、対象の形象の概念を用いて認識対象（所縁）の具備すべき二つの条件を定めた陳那の『観所縁論』（Ālambanaparīkṣā）を読解し、そこでの所縁の定義を論理的に解析した上で、その定義の内容と安慧の論説との関わりを分析する。その結果、知が対象の形象（ākāra）を有することが認識の確定のための重要な要因である、という見解が、安慧のみならず、世親・陳那にも通底していることを指摘する。特に、陳那は、あるものが認識対象として存在するための二つの条件のうちのひとつとして、「識にその形象（ākāra）が顕れること」を説いている。世親は、MAV I.3 偈の解釈では、かならずしもその概念を援用していないが、安慧は、積極的にそれを適用する。すなわち、安慧は、識が四種類に顕現する場合には、それぞれに、その顕現 A を限定・確定するものである、A の形相が必要であると理解している。このことから、MAVṬ を作成するにあたって安慧が陳那の二条件の理論を考慮に入れていたという可能性も決して排除されない、と本論は指摘している。さらに、安慧は、その顕現した対象の存在性について述べる際に、「あるもの A としての顕現（＝識）が正しければ、すなわち、その顕現に対応する対象が存在するならば、その A の顕現は、形相（ākāra）であり、しかも、真実なる顕現である」という認識論的な命題を提示している、ということを本論は論理的に明示している。これらは本論文の成果である。

唯識説での認識論を論じるには、後期大乗仏教の認識論で用いられる用語との対比による考察も必要であろう。例えば、唯識説の用語である「虚妄分別」の分別と仏教論理学派の用語「分別」（kalpanā）の同異をより詳しく調べることにより、唯識説の認識論の構造を別な視点から捉え直すことができるであろう。これは、安慧の認識論の構造を他のパラレル文献を用いてより確実なものにすることなどと共に、今後の課題となろう。

以上、瑜伽行派の唯識説における認識論を対象の顕現という視点から考察し、陳那説や安慧説での対象認識の成立条件を論理的に明確にしたことは、博士学位の授与に値する成果であると判断する。

公開審査会開催日	2013 年 5 月 31 日		
審査委員資格	所属機関名称･資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学 教授	Dr. Phil.（ハンブルク大学）	岩田 孝
審査委員	早稲田大学 教授	博士（文学）早大	大久保 良峻
審査委員	東海大学 准教授		瀧川 郁久
審査委員			
審査委員			